「おふでさき」の有機的展開（30）

第四号：第百十六首～第百三十四首

おやさと研究所嘱託研究員
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

第四号の116首から最後の134首までまとめてみたい。

「親神の自由自在の働きを見せてやりたいが、すべては人間の心次第である（四号116～119）。これからは上に立つ者にも下にいる者にも、この世が元々どのように創まったかを聞かせる。すなわち、『この世の始めは泥の海であり、泥鰌ばかりであった。その泥鰌を人間のたねにしようと思って、泥海から引き上げ食べてしまって、だんだんと守護して人間とした。こうして今日の人間に育て上げるまでの親神の骨折りはなかなか容易なことではなかった。』さて、この話は決して軽く聞いてはいけない。世界中の人間を救けるために教えているのである（120～127）。

今までは親神の教えが広まってもこの世界はそれを解しない者たちによって勝手きままにされてきたが、親神の働きもこれからは人間のその勝手な心に応じて返すから、承知せよ。どれほど剛健な者でも、親神の守護が退けば身動きひとつ取れなくなるのである。人間は、年齢や力に関係なく、心次第で親神からの守護を受けることができる。だから、心得違いのないようにせよ（128～134）。」

さて、今回学んだ点は、125首に「それよりも神の守護というものは並大抵なことでない」と記された人間創造から今日までの親神の尽力・苦労についてである。一般に「苦労する」というと、辞書的には「精神的・肉体的に力を尽くし、苦しい思いをすること」と定義されて、そこには「悩み」「葛藤」「達成感」など心が波打つプロセスが含まれている。しかし、親神がされる尽力には決して苦しい思いはなく、あるいは自己の心に打ち克つような精神的な変動もない。そこにはただ人間を救けてやりたい心があるのみである。したがって、人間がふつう経験する心のあり方としての苦しい思いから推し測っては、親神の尽力は理解できないのである。

そこで、親神はその心尽くしのほどを伝えるために、122、123、124の歌で泥海と泥鰌の話をされた。123によれば、泥鰌は“人間のたね”であり、いわば人間の素材として人間以前の存在である。そして、124によれば、その泥鰌が泥海の中にたくさんいるのを見て親神がしたことは、それを「引き上げて」「食べて」「だんだんと守護した」ことであり、これらの作業が「並大抵なことでない」と言われている。ところで、この泥海という場面設定を、混迷を極める現代社会や、心のほこりが舞う私たちの日常生活と捉えるとき、その話の内容がよく実感されるだろう。すなわち、日常生活において、私たちの心は必ずしも清らかではなく、親神のように人を救けたい一心ではない。「たすけ合う世の中」をスローガンとして掲げても、実際はそれほど上手にたすけ合って生きているわけではなく、むしろ骨肉の争いが日常茶飯事である。まさに、私たちは泥海のような世界で、泥鰌のようにあくせく暮らしているといえる。

そこで、親神は、泥海から泥鰌を引き上げるように、まず、人々を親神のもとに手引かれる。第四号の最初にもあるように、それは多くの場合身の悩みを通してなされる。それから次に、泥鰌を食べるがごとくに、その人の心根を味わう。それは「陽気ぐらし」の世を実現する上でその人をどのように活かそうかと、親神による全人格的な吟味といえよう。そして、だんだんとその者の心を育てて、「人を救けたい一心」になるように仕上げていき、本来の意味での「人間」として育てていく。このように理解するなら、親神の尽力とはいわば育てる苦労といえるだろう。そこで、親神の思いを知る私たちは、人を育てるプロセスに自らの身を置くことによって、親神の大きな心尽くしの一端が味わえるといえる。

とするならば、人間が自らの心のほこりを払おうとする苦労は、親神が味わっておられる尽力とは異なるであろう。むしろ、そのような人間の苦労は“泥海から抜け出そうと足掻く苦労”なのであって、泥海から他を引き上げて育てる苦労ではない。そして、それに類して考えると、親神の思いを知らない者がする苦労とはいわば“泥海で退屈を味わう苦労”だといえる。

このことは、視点を返すと、本来的な意味での「人間」とは誰なのかを示している。親神は泥鰌を「人間のたね」とされて、それを順々と育てて「人間」とされた。したがって、親神の思いを知らない者がする苦労とはいわば「泥鰌の苦労」であって、本来的な「人間」の苦労ではない。そして、本来的な人間とは、人を救けたい一筋の心にまで至った人間であるので、そのような人間がする苦労とは結局のところ親神の親心に倣うような「育てる苦労」だといえる。このように親神の思いを呈して「人間の苦労＝育てる苦労」を味わうことこそが、「陽気ぐらし」に向かう「人間」としての信仰の歩みであろう。

それでは、途中の、「泥海を抜け出そうと足掻く苦労」する者とは誰であろうか。それは一人前の「人間」になりきれない者であり、したがって、明日に自分の理想を託す、信仰の青年期を送る者であるといえよう。つまり、それは、私たち青年のことだ。青年は、人間として決して完成していない。親神にもたれ切れず、迷い、悩み、足を竦ませている。だからこそ、私たちは「おふでさき」を手に取って、神意をたずね、親神の思いに近づこうとする。そもそも「おふでさき」は親神の理を忘れたり違えたりするから記されたものであり、言い換えれば、理に添い切れない者たちの書物であるといえる。その意味で、青年とはまた、「おふでさき」の読者であるともいえよう。

「おふでさき」はそんな青年を受け入れ、とりわけ第四号は、次のように諭す。「神にもたれる子どもは、早く表へ出る準備をせよ。しかし、本当に表へ出ようと思えば、心を静めて“しん”をたずねよ」（83～84）。神にもたれる者ならそのまま人を救けるために世界へ出てもいいはずなのに、親神は念を押すように「心を静めて“しん”をたずねよ」と述べている。お前は本当に神にもたれているのか。お前は親神の苦労を分かってくれる一人前の「人間」か、とその者の腹の底を見極めようとされているようだ。

その親心を受けて、私たち青年は、今日の日の完成ではなく、明日への希望に満ちて、勇気をもって青春の一歩を踏み出す。その意味で、「おふでさきの有機的展開」とは「おふでさきの勇気的展開」だといえよう。